

読み物資料に基づく道徳授業の考察 (7) 価値「家族愛」「文化伝統」に焦点を当てて

川野哲也

A Consideration of Moral Class Based on Reading Materials (7) : Focusing on the Value, “Family Love” “Traditional Culture”,

Tetsuya KAWANO

1. はじめに

学習指導要領には「家族愛」「伝統文化」「郷土愛」の項目がある。「父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと」「郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること」等と示されており¹⁾、その指導が求められている。

子どもは家族や地域などの社会的なかかわりの中で生きている。家族のあたたかな支援や庇護を受けて育ち、豊かな伝統文化の中で育つ。その重みを感じ、自らすすんでこのなかかわりの中で生きていくような人間を育成したい。言い換えるなら、家族が大切、伝統文化が大切だということをしっかり受け止める人間である。ところが近年において、それら価値のあり方は曖昧なものとなってきている。家族のあり方は多様である。夫が外で働き妻は家事に従事するという性別役割分業、母親による愛情をベースとした子育てという近代家族は、昭和の高度経済成長の際に広まった考え方であり、歴史的には浅い²⁾。現在に至っては共働きも多く、母子家庭、父子家庭さえも珍しいものではなくなった。『サザエさん』や『ちびまる子ちゃん』で描かれるような三世代スタイルはむしろ少数派である。勿論、大半が深い家族愛で結ばれていると思われるが、家族愛がゆえに不和になることもある。その一方でDVの問題も指摘されており、愛情不足で苦しむ者もいる。伝統文化についても曖昧である。私たちの生活様式は近代化、西洋化されており、一見したところ伝統文化は失われてしまったかのようなのである。勿論、伝統文化は、現代的な視点で改編されたり、別の文化と融合したりして生き続けているとも言える。その一方で、伝統文化だと思っていたものも実は歴史が浅い、ということもある³⁾。例えば、初詣や七五三等は、明治期以降に広く定着した歴史の浅い年中行事である。伝統文化と銘打つことが宣伝や何らかの戦略として機能することさえある。

「家族愛」を扱う先行研究は、いくつか見出せる。中村美智太郎らは、主人公の中学生が親の愛を感じるという内容の道徳教材を取り上げている⁴⁾。現実には親に対して気持ちが離れてしまっている子もいるため、この教材では現実の子どもには対応できないのではないかと中村は議論する。佐藤裕紀子もまた道徳の教材を取り上げる。教材では、家族が自分の成長を願って愛情を注いでくれる存在として描かれており、家族からの愛情や理解を体験していない子どももいるはずだと指摘する⁵⁾。藤川大祐は道徳授業で扱う教材の中身を問題視して次のように述べている。「教材はすべて、親や祖父母は我が子を大切にしており、子どもが感謝すべき存在として描かれている。愛情があるとは言えない親や歪んだ愛情で子どもを苦しめる親は、一切登場しな

い。このような教科書を扱うことは、虐待に苦しむ子どもに対して、それでも親等に感謝しなければならないと教えることを意味し、虐待を受けている子どもに配慮するどころか、二次的な被害を生じさせる可能性がある。」⁶⁾

「伝統文化」を扱う道徳授業についてもいくつかの先行研究がある。浅香怜子は、伝統文化の一つである盆踊りについて自作教材を作成している⁷⁾。伝統文化を従来のまま維持するべきか、あるいは観光客も一緒になって踊り、その中身も現代風にアレンジするべきかについての討論を含んでいる。鈴木慎一郎は、道徳教科書の教材であるYOSAKOIソーランを取り上げて議論する⁸⁾。YOSAKOIソーランは、その経緯や特質から考えて伝統性が薄いものであり、これを伝統文化として扱ってよいのだろうかと問う。坂倉裕治らは、東北地方の伝統的生活を取り上げた教材開発を行っている⁹⁾。興味深い内容ではあるが、自然に対する畏敬の念と持続可能な社会の実現を含む古い生活様式は、あまりにも現代的生活から離れている。それを活かした実践というのも容易ではない。

以上のように、先行研究が家族愛や伝統文化を扱う際には、その価値が曖昧になっているという点、価値の正統性が揺らいでいるという点が焦点化される。それら課題を無視するべきではないが、しかしながらそのことによってかえって授業のあり方そのものの議論が弱められたように思われる。まずは既存の読み物資料を取り上げ、授業の中で道徳性を深めたり高めたりするなどして議論するべきではないか。価値が曖昧であるという議論は横に置いておき、まずは授業構成そのものに注視した上で検討したい。筆者はこれまで道徳授業を構成する際の視点について取り上げてきた¹⁰⁾。この流れの中で「家族愛」「伝統文化」を取り上げてみたい¹¹⁾。本論文では資料の扱い方を中心に取り上げ、より深い、実りのある道徳授業のあり方について検討する。

2. 家族を愛するということ

一般論から確認していこう。赤子が生まれると父母は懸命に赤子の世話をする。食事、排泄、風呂、着替え、遊び、等、かなりの時間をとって世話をしていく。事故を心配し、病気では看病し、我が子の将来を心配する。親は子へ一方的な無償の愛を注いでいく。それがどこにでもある普通の風景であり、そうとらえると、家族とはやはり愛情によって成立していると言ってよい。その後、子どもは成長していき、自立に向かって動き始める。小学生になれば、勉強や躰について教えることが増える。あるいは余暇や遊び等、一緒に楽しんだり考えたりすることが増えてくる。親は稼いだ収入の大半を子どもに使い、また本来自由な時間の大半を子どもに使う。その自己犠牲を楽しみながら過ごし、子どもの成長を喜んでいく。

しかし子どもが成長するにつれてトラブルや葛藤も増えてくる。子どもは好き勝手、自由気ままなことをやり始める。親の思いが強すぎてもうまくいかず、逆に関心を持たず放置してしまえばまた問題になる。かつて河合隼雄がまとめた『父親の力 母親の力』には様々な葛藤が触れられている¹²⁾。何をやってもどんなことをしても赤ちゃんが泣き止まず、いらいらしてつい手をあげてしまう母親の話、親が子どもにこうあってほしいと強く思うがゆえいつまでも心配してしまい、子離れが出来ないという話、父親が家庭の中で威厳を持って存在するということができなくなったという話、一生懸命のつもりで子どもに声をかけるが、かえって過干渉に感じられてしまうという話、早期教育や塾などに行かせてお金をかけようとする母親の話、などである。

柏木恵子の『親と子の愛情と戦略』においても家族の難しさが描かれる¹³⁾。親はよかれと思い、塾や習い事に行かせる。子どもの達成や成功を母親が自分自身の成功と錯覚してしまい、それゆえ教育熱心になってしまう。その一方で大半の父親は子育てには参加しない。趣味や気分転換のような感覚で子どもの遊び相手になる。夫が非協力的であると母親は育児不安が強くなり、子育てにネガティブな感情が強くなるという。子どもに対してはできるだけのことをすると考える親

は多い。それゆえ親としての期間が長期化し、成人後も経済的には両親に依存する者も少くない。

どこの家庭にも大小違いはあれども何らかの課題はある。しかしながら虐待のような場合は別として、子どもの側が、産み育てている家族に対して愛情を持って接することは大切なことである。中学校の学習指導要領の解説には以下のように示される。

「祖父母や父母が在ること、そして自分は、そのかけがえのない子供として深い愛情をもって育てられていることに気付かせることが大切である。そのことを通して、自分の成長を願い無私の愛情をもって育ててくれた父母や祖父母に対して敬愛の気持ちを深めることが必要である。」¹⁴⁾

ここで示されていることは、親から子への愛情があり、子がその愛情に気づくということによって子から親への愛を持つ、という論理である。この内容は、先に示した愛ゆえの不和を想起すれば、いささか理想的過ぎるようにも思われる。不和の中であって子どもは何をすればよいのか。子どもは、親や家族に対してどのような心境になればよいのか。このあたりの参考資料は乏しい。

そこでいっそう根本的な概念から再確認してみたい。愛とはどういうものか。エーリッヒ・フロムは『愛するということ』の中で、愛の概念について議論している¹⁵⁾。フロムによれば愛とは、性的な快楽を得ることが第一ではなく、また特定の誰かとだけ排他的に結ばれるというようなものでもない。愛というのは見返りを期待することなく与えるものである。与えるからといって、自分のものを減らす、自己を犠牲にしたりするようなものではない。以下はフロムの文章である。

「与えることは、自分のもてる力のもっとも高度な表現である。与えるというまさにその行為を通じて、私は自分が生命力にあふれ、惜しみなく消費し、いきいきとしているのを実感し、それゆえに喜びをおぼえる。」¹⁶⁾

愛とは、自分の豊かな力を表現し、自分の生産力を他者や周囲に与えていく、ということである。母親が生まれたばかりの赤子に接している様子を想起するとよい。自分自身をも大切にしながら、他者を大切にしていこうとする姿である。自分自身にも他者にも、さらには関係する周囲の人々にも、あらゆる方面に同時に向けていくもの、それがフロムの考える愛である。

フロムによれば、愛についての基本的要素があるという。それは相手の生命と成長を気にかけるということ（配慮）、相手の思いや要求には反応するということ（責任）、相手がその人らしく成長発展していくように気づかうということ（尊重）、その人のことをよく知ろうとすること（知）、などを挙げていく。愛する存在になるための大きな障害が、ナルシズム、利己主義である。本来、自分と他者はつながっているのであるから、他者への愛と自己への愛を分割することはできないはずである。

以上の議論を筆者なりに解釈してみたい。おそらく愛というのは、例えば、多くの友人・知人を呼んでパーティを開くようなものであろう。相手のことに関心や興味を持ち、その人の思いを理解し、応援したり励ましたりする。自らのユーモアで人々を笑わせたり、手伝ったりすることもあるかもしれない。自分本位の利己主義ではなく、逆に自己犠牲により他者に捧げるということでもない。自他ともに一緒に喜びを分かち合うようなものである。

学童期の子どもが家族（父母や祖父母）を大切にすることを想定してみる。おそらくは子どもが父母や祖父母らの思いや葛藤が分かるようになるということ、家族の中で自分にできることを行動する、ということであろう。例えば皆で一緒に大掃除をするとか、料理を作って皆で食べるとか、弟や妹の世話を楽しんどるとか、家族の中に辛い状況の人がいれば皆で励ます、等である。これは我慢するとか、父母を優先するといった自己犠牲を指すものではない。逆に自分だけが利益を得るということでもない。

親は子に愛を持って接するが、それゆえ不和をもたらしつつも、子は苦しい立場に置かれ

ることもあるが、関係する人々全てを理解し、支え、みなで感動や喜びを共有できることを取り組む。このあたりの姿に、家族愛のあり方を見出すことができる。

3. 家族愛についての読み物資料と授業

道徳授業の教材を取り上げて、授業のあり方を検討したい。最初に取り上げるのは、小学校中学年で用いられる資料、読み物資料「ブラッドレーのせいきゅう書」である¹⁷⁾。

ある朝、ブラッドレーが母親あてで請求書を書いてきた。そこには「お使いちん1ドル、おそうじ代2ドル、けいこのごほうび1ドル、合計4ドル」とある。この時、母はにっこり笑うだけで何も言わなかった。母は、昼の食事の際には4ドルを持ってきて、ブラッドレーに渡す。それと同時に、母は、息子への請求書なるものを渡した。そこには「親切にしてあげた代、病気をしたときのかん病代、洋服やくつやおもちゃ代、食事代と部屋代」と書かれてあり、全て0ドルであった。たかしは涙を流し、4ドルを母に返した上で、ごめんなさいと謝った。

多くの実践では、ブラッドレーはどんな気持ちかという問いを中心として展開する。まずは市川麻衣の実践例である¹⁸⁾。まずはブラッドレーはどんな気持ちでお母さんに請求書を書いたかと問う。子どもからは「お手伝いをしたのだからお金をもらうのは当たり前だ」「働いたらお金をもらうもの」等の答えを引き出す。さらに「お金を受け取ったブラッドレーはどう思うか」「お母さんの請求書を読んだあと、ブラッドレーはどんなことを考えたか」と問う。子どもからは「お金をほしがって、はずかしい」「お母さんの気持ちや、いつもお世話になっていることがよくわかった」「自分のことばかり考えて、ごめんなさい」「お母さんがいつも自分にくれていることを考えたら、お手伝いは当たり前なことなんだと思う」等の答えを引き出す。主人公の思いに共感しながら親に対する感謝の気持ちを膨らませていくというのが授業の進行である。他の実践例もほぼ同じ流れである¹⁹⁾。

加藤宣行による実践は興味深い²⁰⁾。加藤が目を向けるのは、主人公が母親の深い愛情に気づいたから涙を流したのだという点である。中心発問は「ブラッドレーはどうして泣いたのだろうか?」である。その箇所での子どもたちの答えは「お母さんの大好きな気持ちに気づいた」「お母さんの愛情に気がついた」「子どもの笑顔が見たい」「自分よりも子どもが大切」等である。ここで子どもたちは多くの言葉を使っていないが、おそらく母が苦勞して子育てをしているという点を受け止めた上での発言である。なお授業の最後には、家族とは何かという議論に向かう。子どもからは「支え合っている大切な人」「心のよりどころ」等の答えを引き出す。

別のいくつかの指導案では、母親の思いに迫る問いを掲げる。例えば堀田和秀は、「お母さんが0ドルのせい求書をブラッドレーに渡した理由は何ですか」と問う²¹⁾。子どもからは「普段、いろんなことをお金をもらわずにやっていることを知ってほしかったから」「ブラッドレーのやっていることはおかしい、ということを伝えたかったから」等という答えを期待する。また杉本と高宮の実践例でも「お母さんが伝えたかったことは、何だったのだろうか?」と問う²²⁾。子どもからは「お母さんは、お金のために仕事をしているのではなく、家族のために仕事をしている」という発言を引き出す。授業者は家族の愛だということを示唆しようとしている。

母がどんな思いで請求書を書いて渡したのか、という点は議論としては興味深い。しかしながらそこから母親の愛情を導き出すのはやや無理があるように思われる。というのも、真に重要なことは請求書を書いたことではなく、家族のために家事をしたり、子どもを病院へ連れていったり、世話をしたりといった膨大な仕事の方にある。それを賃金の代替や自己犠牲としてではなく、家族愛として行っているという側面が重要である。

次に取り上げる読み物資料は小学校高学年の資料「たまご焼き」である²³⁾。

5年生のみんなで、近くのお寺まで遠足である。クラス担任の由紀先生は自分が小学生の頃を思い出す。以下は由紀先生の話である。由紀の家は、山深い村にあって、父母とも農作業で大変だった。遠足にはたまご焼きを入れて、と頼んでみたが、ちょうど卵を切らしていた。実は当時、卵は高価だったのである。何度も懇願する由紀、ついに怒り出す父母。由紀は泣きながら眠ってしまい、翌日大急ぎで学校に向かう。遠足ではお弁当にたまご焼きが入っていた。由紀は涙を流し、父母にお礼を言う。

この資料についての実践がいくつかある。鈴木裕子の実践例では、父に叱られた際、由紀はどんなことを思ったか、と問う²⁴⁾。その後、「卵焼きの味が口いっぱい広がって涙が流れたときの由紀の心の中はどうだったか」という問いを掲げている。子どもたちからは「昨日はあんなに駄々をこねて悪かったな。寝ている間に一生懸命どうにかしようとしてくれて、急いで作ってくれたんだ。うれしい。ありがとう」「昨日は怒って泣いていて、それはいけなかった。愛情がこもっていて、今まで食べた中で一番おいしい卵焼きだ」「お父さんもお母さんも仕事でいつも忙しいのに、わざわざ卵を何とかしてくれて、すごく有り難いな」等の答えを引き出している。他にもいくつかの実践例があるが、おおむね同様の視点で考えられている²⁵⁾。

主人公はどんな思いかと問うた際、おそらく嬉しい、ありがという思いが先に出てくるであろう。その上でさらにじっくりと考えていくなれば、ワガママを言ってしまっただけで悪かったという反省の思いも出てくる。さらに、疲れている中で卵を調達してくれた、卵焼きを作ってくれた、親の側の葛藤や苦しみが想像できればよい。

その点で飯島進による実践は参考になる²⁶⁾。飯島の事例では授業の最初に「この頃の日本人の生活を知っていますか？」と問い、当時の人々が山林や田畑での重労働で生活をしてきたということ、卵や肉が貴重品だったことを確認する。授業の後半では「なぜ、主人公は涙を流したのだと思いますか？」と問う。自分がわがままを言ったことについての反省、それゆえ父母に負担をかけてしまったことへの反省、さらに疲れている中で自分のために頑張ってくれた父母の愛情への気付き、などの意見を引き出そうとする。

最後に取り上げるのは中学校用の教材「一冊のノート」である²⁷⁾。

兄(ぼく)と弟(隆)は、最近の祖母を心配する。もとはしっかり者の祖母であり、地域活動をしながら孫の世話をよくしてくれていた。兄弟はこれまでは祖母に頼ってきた。最近は何事もなく、トラブルになることも多くなる。祖母の言動に対して、ぼくも弟も厳しい言い方をしてしまう。父はみんなで見守ろうと提案する。ぼくは、祖母がつけている日記を見つける。中を見ると、祖母の思いが書かれていた。ぼくは、いたたまれない気持ちになる。その後、祖母の並び、二人で草取りをする。

授業においては前半では、おばあちゃんに対する不満や苛立ちを明らかにし、後半ではおばあちゃんに対して申し訳ないという気持ちと感謝の気持ちを明らかにしていく。村田寿美子の実践を取り上げる²⁸⁾。「ぼくら迷惑してるんだというときの僕は、祖母に対してどんな思いを抱いているのだろう」と問う。子どもからは「おばあちゃんがしっかりしてくれないと困る」「よけいなことしないでよ」等の答えを引き出す。「買い物に行った祖母とすれ違うとき、ぼくはどう考えて、知らん顔をして通り過ぎたのだろう」と問う。子どもからは「格好が悪い。恥ずかしい。」「友達に馬鹿にされたくない」などの答えを引き出す。ここまではネガティブなとらえ方である。

その後、ノートを見て変わっていく。「父から祖母の病気の話を聞いて、ぼくはどう思っただろう」と問う。子どもからは「そんな病気で、物忘れがひどくなっているのは分かった」「でも、実際に被害にあっているのをどうしたらいいのか」等の答えを引き出す。「いたたまれなくなって外に出たぼくは、黙って祖母と並んで草とりをしながら心の中でおばあちゃんに何と語りかけていたであろう」と問う。「おばあちゃんの気持ちも知らないで、ごめんなさい」「おばあちゃん、ありがとう」「ぼくが今度は手伝うよ」等の答えを抱いていく。

この授業における中学生の感想文が重要である。村田の実践では次の感想文が記されている。「家族というものが、不満をぶつけ合い、そして、その後に相手のことを理解し、家族というつながりが深まっていくものだと思います。」

「居て当たり前、やってくれて当たり前と思っているから、『ぼく』はおばあちゃんに言いたい放題言っていたんだと思う。失ってからじゃあ遅かったから、早く気づけてよかったと思う。家族はいつもそばに居てくれるけど、居て当たり前ではないのだと思った。」

この感想文は重要な点を指摘しているように思われる。前半の心無い発言を間違いだと反省するだけでなく、気持ちを素直にぶつけ合う家族の姿として好意的にとらえているようなのである。生徒は、家族とは何かという問いを掲げて、その問いについて考察をしているようなのである。

他にも磯部一雄の実践がある²⁹⁾。そこでは祖母のノートを見たときの主人公の思いを想像し、さらに表現させる。さらに隣で草取りをしたときの主人公の思いを想像させている。主人公の思いを追体験しながら議論するような授業の形である。この授業の最後の生徒の感想文である。

「今自分はやっていたと思ったことをやっていなかったり、逆に自分はやっていないと思ったことがやってあったり、人間には忘れてしまうことがたくさんあるけど、それでも一生懸命に生きようとする人には、ただ怒鳴るということではなく、一歩引いて温かく見守ってあげることが、家族であっても大切なあとだと思います。」

非常に重要な指摘である。祖母に不満があって言いたいことを言ってみたが、祖母の深い愛情を知り、複雑な感情になるということの自覚である。これまでやさしく接してくれてありがとう、だから私もやさしくするね、というような簡単な話ではない。10年以上にわたる変化、人間は老いていくという現実を前に、どうしようもない思いになる。可哀そうというか、申し訳ないというか、言葉が見つからない。愛情をもらっておきながら、それを返すことができなくなっている。困惑する感覚である。とてもスッキリするような話ではない。授業としては主人公はどう思ったかという問いで進行しているが、生徒の思考は、こうしたやりとり全体を通してどんなことを感じたかという考察になっている。すなわち、一歩引いて眺めるというスタンスである。この有意義な考察を促すために、授業の後半において「家族とは何か」という全体を問うような問いが重要なのではないか。

一方で、問題解決学習という形での授業もある。例えば竹内稔博の実践例である³⁰⁾。竹内の授業における中心発問は「主人公は今後、おばあちゃんとどのように接していくべきでしょうか」である。その問いをめぐり、「今までは自分が面倒を見てもらっていたけれど、今後は自分がおばあちゃんを支えていこうとする」「どう接していくか迷う。毎日物忘れをしたり、物をなくしたと騒がれたりして、面倒をずっと見ていかなければならないという苦しみがある」「施設に入れる。毎日老人ホームの人にやさしく介護してもらえらるなら、そのほうが祖母もうれしいと思う」等の答えを引き出そうとする。ここでは認知症の高齢者をどのように支えていくかという議論になる³¹⁾。

このような問題解決型の授業は、その議論の中心が、高齢者介護の問題をどのように解決するかという点に焦点が移ってしまう。心身が自由にならなくなった後の家族関係の問題は、勿論大

切な議題ではある。しかしながらこの議論は、家族に対する思い、家族愛についての考察から離れたものになってしまう。

以上3つの教材とその授業の形を取り上げてきた。読み物資料には、家族愛のことにいまひとつ気づいていない主人公が登場する。子どもはその主人公の視点から家族のあり方を議論していく。「おこづかいが欲しい」とか「美味しい卵が食べたい」といった自分の要望を親に訴える姿には、親は子どもの要望に応じてくれるはずだという暗黙の前提がある。親を信頼している、と言えなくもないが、やはり自分本位であって愛の姿としては不十分である。いったんその思いから離れるとよい。親が家事にしても仕事にしても大変な時間と労力をかけているのは当たり前ではなく、親の愛によるところが大きい。親が何をしているかという姿をむしろ冷静かつ客観的にとらえることが重要であり、そのことでむしろ親から子への愛情が見えてくる。重要なことは子から親への愛である。利己的な思いから離れ、親を心配する気持ちが芽生えるだけで十分のように思われる。

4. 伝統文化を大切にすること

伝統文化は、国語、社会、音楽、美術などの各教科、道徳科、総合、特別活動などの様々な教育活動の中で扱われる。「伝統文化」の主な内容については、山本素子が分かりやすくまとめている³²⁾。まずは歌舞伎や能・狂言、落語などの伝統芸能がある。陶芸、漆、染織物、和紙などの伝統工芸もある。茶道、いけばな、邦楽などの稽古事もある。浮世絵や庭園、書道などの芸術、ひな祭りや七夕などの年中行事、相撲、柔道や空手などの武道などがある。それ以外にも畳やふすま等の日本家屋の作り、風呂敷や扇子などの道具などもある。このように並べてみると非常に多くの伝統文化があることが分かる。

教師の中には伝統文化についての教材研究を深めた者もいる。松藤司は小学校中学校での国語や社会科の授業に役立つための伝統文化を整理する³³⁾。堅穴式住居や寝殿造り、江戸の町づくり、意外にも肉食が多かったこと、古くから富士山を愛してきたということ、江戸時代の子育て事情、江戸しぐさ、寺子屋、観光などについて触れている。ちなみに「江戸しぐさ」は、歴史研究家の原田実によって捏造であることが明らかになっている³⁴⁾。

伝統文化の扱い方にはいくつか注意しておくべきことがある。梶田叡一によれば、伝統文化を扱う事例には、思いつきによるもの、趣味的な活動が見られるという³⁵⁾。その活動を取り入れる目的、何のためかという部分を明確に位置付けるべきだと梶田は考える。さらに梶田は、過去のものは全て良いという回顧主義や日本だけが素晴らしいという自民族中心主義など、陥りやすい落とし穴がいくつかあると指摘する。

本論は道徳科における授業の検討である。改めて学習指導要領がどのようなことを示しているかを確認しよう。中学校の解説編には以下のように示される。

「郷土によって育まれてきた伝統と文化に触れ、体験することを通して、そのよさに気づき、郷土に対する誇りや愛着をもつとともに、郷土に対して主体的に関わろうとする心や態度も育まれる。」³⁶⁾

いっそう詳しい説明が欲しいところである。文部省が作成した『指導の手引き』の中に重要な説明箇所がある³⁷⁾。文化や伝統を大切にすることはどういうことか。それは「単に昔から伝えられ、古いものだから価値があるということではない。例えば、郷土の文化財や伝統芸能、伝統工芸等を誇りに思い大切にすることも、そこに込められた様々な人間の営みを大事にしたいと考えるから」である。また「文化や伝統を大切にすることは、決して過去に向かっていてのではない。重要なことは、目に見えないものを思う想像力である。(中略)文化や伝統を考えることは、目に見えない人間関係の重要性を考えることでもある。人間関係の目に見えない部分は、過去の人と

の関係だけではない。我々の生活は、会うことのない世界の人々とのつながりの中で成り立っている」等と説明されている。伝統文化に込められた人々の営みについて、様々な想像を膨らませながら読み取っていく姿勢が重要だというのである。

文化伝統に際してどのような人々の営みがあるのか、それを想像するとはどのようなことなのか。一例を挙げておきたい。それは松岡正剛が『日本文化の核心』で取り上げている話である³⁸⁾。鎌倉初期の武士に西行がいる。出家して僧侶になり、貧しい生活をしていた。そこに客が訪れ、何もないけれども…という思いで茶を差し出す。不如意を詫げる気持ちこそが尊いということになり、ここから「侘び」という価値が生まれたという。現在、私たちは「侘び・寂び」という言葉だけを聞き親しんでいるが、上記の説明を受ければ、僅かでもその核心に触れたような気持ちになるであろう。

子どもからすれば伝統文化とはいくつかの形式あるいは仕組みである（有形無形を含め）。その形を知って終わりではない。その奥の何かに目を向けていくような姿勢は重要である。お茶という形の背後には、お茶を通して人々がコミュニケーションを重ねてきたという部分、剣道という形の背景には、心を鍛える、弱い心を乗り越えていくという部分がある。人々が大切にしてきたのは形式そのものというよりはむしろ、人々の想いや関係性だからである。それら精神性や思想性は、勿論、仮説の域を出ないかもしれないが、それを想像しながら考えていくということが重要である。

5. 伝統文化についての読み物資料と授業

道徳授業の教材を取り上げて、授業のあり方を検討したい。まずは小学校中学年でよく取り上げられる「祭りだいこ」である³⁹⁾。

主人公の良子は、毎年行われる地域の祭りの山車に参加することになった。これまでもはっぴを着て太鼓などを演奏している上級生を見てあこがれの気持ちをいただいていた。父親も勧められる。良子はしばらく迷った後に、親友の山田さんを誘うことにした。1か月半練習を重ねる。練習にも多くの大人が集まってくる。当日は一生懸命に取り組み、たくさんの人々と祭りを楽しめたことを誇りに思う。

授業は、主人公はどう思ったかという主人公の視点で進めることになる。荒川茂樹の実践を取り上げる⁴⁰⁾。「父におはやしをしないかと誘われて、『少し考えさせてね』と言ったときの良子は、どんな気持ちだったか」と問う。「女の子ひとりでははずかしい」「うまくできるかな」などの迷いを明らかにしていく。さらに「おはよしの練習をしながら、良子はどんなことを考えただろう」と問う。「早く上手になりたい」「祭りを楽しみにしている人たちのために頑張ろう」等という答えを引き出す。最後に「山田さんと顔を見合わせてにっこりとした良子はどんな気持ちだろう」と問う。「うれしい。みんなに喜んでもらえてよかった」「お祭りに参加してよかった」等の答えを引き出していく。主人公の体験に沿いながらその思いを明らかにするというのが授業の進行である。他の実践例もほぼ同じ流れとなっている⁴¹⁾。

なお荒川茂樹の授業では最後に「みなさんも良子さんみたいに地域の行事や活動に参加してよかったなと思ったことはありますか?」と問う。子どもからは「地域のゴミ拾いに参加した」「コミュニティ会館の餅つき大会に参加した」等の声が聞こえてくる。子どもたちも少なからず経験がある。それは知らない人同士が行事を通して声をかけあい、喜びを共有していくという経験である。子どもたちがそのことを冷静にとらえることができるとうい。

次に取り上げるのは小学校高学年の教材「人間をつくる道 剣道」である⁴²⁾。

主人公のぼくは、剣道を習って3年目になる。正座の仕方や動作の仕方などを長い間、教えられ、やっとのことで試合となる。試合ではあっという間に負けてしまう。ふてくされた態度でいると先生から注意を受ける。勝っても負けても礼儀を守り立派に引き下がることが大切だと教えられる。ぼくは、剣道が人間をつくるという話を聞いて大切なことを学んだと感じる。

中治謙一による実践例では、「大人の試合をみながら『ぼく』はどのようなことを考えているか」と問う⁴³⁾。子どもからは「動きがとても速くて、驚いた」「とても美しい引き上げだなあ」という答えを引き出す。さらに「剣道は『人間を作る道』という言葉聞いて、『ぼく』はどのようなことを考えたでしょう」と問う。子どもからは「礼を大切にしているところ」「悔しくても我慢しているところ」「打たれても、打たれても頑張っているところ」「相手を敬っているところ」等という答えを引き出ししている。主人公の思いを想像しながら考える、特に人間を作る道という言葉の意味を考えるというのが授業の進行である。他の実践例もほぼ同じ流れとなっている⁴⁴⁾。

重要だと感じたのが古見豪基による実践である⁴⁵⁾。ここでは「主人公が大人の試合を見て美しいと感じたところはどこだろう」と問うている。子どもからは「我慢が美しいのかな。負けた側だけの問題なのかな」「勝った側も美しいと思ったんだよ。だって勝ったのに喜んでないよ」という声が聞こえてくる。そこで教師は「そのあたりに何か大切な心がありそうだね」と言ってさらに議論を促す。その結果、子どもから「勝っても負けても謙虚な態度をとることが大切なんだろうと思う。謙虚な人は、たくさんの人からたくさん学ぶから成長するスピードも速いと思う」「全力で試合をした相手に感謝の気持ちをもつことはできるね」等という発言も出てくる。このあたりのじっくりした議論は重要である。剣道という形態の裏に何かがあると示唆して、それを探究していくのである。

杉本遼と高宮正貴の提示する実践例は異なる⁴⁶⁾。この実践では、少し違った角度から問いかけられているように思われる。「なぜ、そこまで引き上げを大事にしないといけないの?」と問う。授業者は引き上げの大切さに気付かせようとしているのだが、問いの仕方が、礼儀は不要といった批判的ニュアンスを含んでいる。それゆえ子どもからは「剣道のルールだから守らないといけない」「後で怒るのはいいと思う。心の中までは見えないから」といった反応が聞こえる。授業者はさらに「昔からのことを続け、古いものを残す必要があると思うか?」と問う。授業者としては日本人が大事にしてきたことは残すべきだという思いがある。しかし問いの仕方自体に、残さなくてもよいのではというニュアンスが含まれているようである。子どもからは「昔から続いているからよいものとは限らない。よくないなら、変える」「引き上げて剣道が嫌いになる」などの声が聞こえる。授業者の思いがどこにあったかは別として、本当に必要なのか? 必要ではないのでは? といった問いかけでは、批判的なとらえ方にならざるを得ない。この議論では本当の良さを見つめて探していこうという姿勢にならないように思われる。きっと大切なことが含まれているはずだ、それは何だろうか、想像して考えてみよう、という姿勢が大切ではないか。

最後に中学校の教材「日本の伝統と文化にふれて：古都の雅、菓子の心」である⁴⁷⁾。

茶の湯で出されるお菓子には特別な意味があるという。明治26年創業の老舗店、山口さんはその思いを語る。客人をもてなすために、季節の自然や風景や文化的なものをお菓子で表現する。一つひとつ不揃いに、遊び心を入れ、生命力をふきこんで作る。山口さんは父よりも効率よくうまく作れると自負していたが、評価は悪かった。猛勉強し、お客一人ひとりに正面から向き合うように心がけた。その後、山口さんは菓子作りとして成功を収める。

飯島進がこの資料を取り上げた授業展開を示している⁴⁸⁾。「若い頃の山口さんは、どんな考え

で菓子を作っていましたか？」と問う。「効率的に仕事をする」「父に負けない」等の答えを引き出す。「成功するまで、山口さんはどんな努力をしていましたか？」と問う。「注文に向かい合う」「誠意をつくす」「歴史、芸術まで学び、生かそうとする」等の答えを引き出す。成功前後を比べた上で「おもてなしの文化には、どんな思いが込められていると思いますか？」と問う。「小さなことにも意味がある」「楽しい時間をつくるために全力を尽くす」といった答えを引き出していく。

京菓子という伝統文化の背景を考える上で、示唆的な話がある。松岡正剛は『日本文化の核心』の中で、日本人が小さいものを大切にしてきたと指摘している⁴⁹⁾。小さいものは美しい、という感覚は日本文化の特徴の一つだと言う。確かに、ひな人形からガシャポンまで、日本人には小さなものに様々な思いを込め、またその小さいものから様々な思いを読み取ってきた。京菓子の文化も同じ流れにあると言えるのではないか。

この資料に関しては内田仁志による実践例がある⁵⁰⁾。この授業では主人公である山口富蔵さんの考え・生き方に賛成か反対かを問う。賛成意見としては「和菓子一つにこだわる富蔵さんはすばらしい」「茶の湯を成功させるために和菓子は必要だ」という意見を引き出し、反対意見としては「茶の湯のメインアイテムでないのだからそこまでこだわる必要はない」「今のままでは、大量生産できない。和菓子を広めることを考えた方がいい」などの意見を引き出す。両方の意見を挙げた上で伝統を受け継ぐことの大切さを考えていくという授業である。内田の授業は対話的ということを目指すあまり、伝統文化を一回否定してみるということを見せている。しかしこれでは議論がどうしても表面的なものに終わってしまう。伝統文化を扱う際にはそれが何か深く大切なものを含んでいるという前提で、それを想像していくことが重要だと思われる。

以上3つの教材とその授業の形を取り上げてきた。読み物資料には、それほど伝統文化に触れていなかった人物が登場する。子どもはその主人公の視点から伝統文化のあり方を議論していく。最初は敬遠していたけれどもやってみると楽しかった、あるいは難しかったなどの感想が聞こえる。しかし重要なのは本人の経験というよりはむしろ、それをめぐる人々の営みである。伝統文化をめぐる人々の思いや願い、人々が出会ったり感動したりするというその状況をむしろ冷静かつ客観的にとらえることが重要である。すなわち伝統文化の奥に何か大切なものがあるはずだという前提で、その奥深くを探究する。その議論によって伝統文化の重みを感じられるように思われる。

6. 考察

読み物資料とその授業のあり方について議論してきた。家族愛をテーマにした道徳授業は、基本的には主人公の視点から家族について考察を深めていくことになるが、主人公の個人的感情や要望からいったん離れ、冷静に親の姿をとらえることができれば、逆に親の愛情が見えてくる。伝統文化をテーマにした道徳授業は、基本的には主人公の視点から伝統文化について考察を深めていくことになるが、主人公の個人的感情や体験からいったん離れ、人々の姿や営みを客観的にとらえることができれば、逆にその広がりや重みが見えてくる。どちらも同様の視野がひらけてきた。主人公の素直な要望や人物の体験にとどまってしまうと大切なものが見えなくなるため、そこに何かあるのか？なぜそうなっているのか？という問いを掲げ、子どもから見えにくいものを見えるようにするとよい。深いところが少し見えてきた時に、重さのようなものを感じられるであろう。

さて、それでは次に、道徳授業の構成上の問題を再度とらえてみたい。これまで筆者が議論してきたことではあるが⁵¹⁾、道徳授業の問いは以下の三つである。

- ①「人物はどのような心情か」
- ②「人物はどのような行動をとるべきか」
- ③「人物がそうしたのとはなぜか、人物がそうすべきなのとはなぜか」

道徳授業は①の問いから始まる。読み物資料には主人公（中心人物）がいる。その人物の思いをたどりながら、どんな思いだったのかを明らかにしながら授業を進めていくことになる。なぜ主人公は涙を流したのか、主人公が大切だと気付いたことは何か、などで議論は広がっていく。資料は、何か大きなことがらがあって、それによって主人公の言動が変化した、という展開になっていることが多い。それゆえなぜ主人公の心が動いたのか、主人公がどんなことに気づいたのか、そのことを探るのである。最初は①として議論していたとしても、いつの間にか③の発問へと移行していく。理由や背景を探りながら、親が子どもに愛情を注いでいるということ、あるいは伝統文化が多くの人々の中で生き続けているということに気づく。

ところで価値というのは、一歩下がったところから全体像を見て明らかになるようである。親は多大な時間と労力をかけて子どもを大切にしているのだが、子どもが自分の要望を主張している際にはそれに気づけない。伝統文化は人々が時間と労力をかけて大切に伝えてきているものであるが、子どもが体験している際にはそれに気づけない。道徳授業では、子どもの思いではなく、全体に対する客観的冷静にとらえることによって、価値の重みが見えてくる、と言えそうである。

ここで一つ問題提起をしておきたい。授業の最後になると、家族って何だろう、伝統文化って何だろうといった抽象的哲学的な議論に向かうことがある。「一冊のノート」における生徒の感想文は、家族って何だろうという問いに対する答えを模索しているように見えた。「祭りだいこ」で少し示唆されたのは、伝統文化の中身そのものではなく、伝統文化をめぐる多くの人々が集まり、応援し、励ますという風景であった。複雑な議論を終えた後で改めて抽象的な議論になることは、深みがあってよい。それを促進するべく、「〇〇とは何か」といった発問を、①②③のいずれにも含まれない4つ目の問いとして位置づけることが出来るかもしれない。この点については今後の検討課題である。

では②についてである。それは「主人公はどうするべきか」「もしあなたが主人公だったらどうするか」といった問いである。これは、主人公の言動を善いかどうか評価するという議論も含まれる。この問いは、選択肢のような答えに至る。家族に対して愛情を持って接するべきか（あるいは、そうでないか）。伝統文化を継承し発展させるべきか（あるいは、そうでないか）。判断場面のようなものを提示し、その先は子どもたちの自由な討論に委ねていく。この問いはどの程度有効だろうか。

家族愛にしても、伝統文化にしても、一般的にはそれが大切だと言われている。それを疑ってみる、本当にそれは大切なことなのか、ひょっとしたら大切ではないのかもしれない、②はそんな問題意識を含む。現代社会において家族愛、伝統文化という価値が曖昧になっている。それゆえこの問いを提起してみたいかなるのかもしれない。どうするべきかという問いは、一見したところ未来に開かれた問題解決的な学びであるように見える。主体的な判断を求めるという意味では良いのかもしれない。しかし道徳授業において②の問いは、価値そのものを疑うという結末へ向かう。子どもたちはおそらく親や家族の深い愛には気づきにくいし、伝統文化の重みや大切さについては見えてこない。そんな状態で②の発問をすれば、大切にすべきではないという判断をいだいてしまう。道徳授業とは本来、狭い自分を広い自分へと開いていくことが重要であるのに、このような問いでは狭い自分そのものを肯定してしまい、深いところへの探究をふさいでしまうと思われる。②の問いは、できるだけ避けておくべきだというのが本論の到達点である。

子どもが、家族を大切にできるようになるとか、伝統文化を大切にできるようになるといった究

極的な目標はどうだろうか。それは達成可能なのであろうか。授業の中でそれを目指してもよいのだろうか。態度は、おそらく実生活における体験を通して少しずつ形成されていくものであり、道徳授業だけで達成できるものではない。豊かな家庭生活を経験しながら家族愛を形成するであろうし、豊かな伝統文化に囲まれて伝統文化の大切さに気付く。道徳の授業とはそのことについて深く考え、探究していく機会である。子どもが「〇〇が大切です」と言ったからといって本当にそれを実感しているかどうかは怪しいところである。家族を大切にするというのは、周囲に関心を向け、周囲を心配し、みな喜びや幸せのためにできることをするという姿勢である。伝統文化を大切にするというのは、伝統文化の背景や本質を見極めようという姿勢である。人々の生活の中に潜むその部分を、重みを持ってとらえるということである。考察すればするほど「〇〇が大切です」などと簡単に表現できなくなるはずであり、それこそが価値の重みを示しているのである。

<注および参考文献>

- 1) 文部科学省『平成29年告示 中学校学習指導要領』。小学校の内容項目もこれに準じている。
- 2) 本多真隆は、明治以降の家族論の変遷、現代における議論について明らかにしている。本多真隆著『「家庭」の誕生』ちくま新書、2023年。
- 3) 藤井青銅は興味深い指摘をしている。伝統文化のいくつかは明治以降に広まった新しい現象である。伝統文化だと宣伝することがビジネスになるということ（伝統ビジネス）、伝統だからという理由で権威をかざし、他者を従わせようとする（伝統マウンティング）などがあると指摘する。藤井青銅著『「日本の伝統」の正体』柏書房、2017年。藤井青銅著『「日本の伝統」という幻想』柏書房、2018年。
- 4) 中村美智太郎、藤井基貴「道徳教育における内容項目「家族愛」に関する基礎的研究」『静岡大学教育実践総合センター紀要』第25巻、2016年、pp.11-20。家族という概念は中世の頃には共同体への従属という側面が強かったが、近代へ移行するにつれて共同体から離れた愛による一体感という側面を持ち始めたという。
- 5) 佐藤裕紀子『「特別の教科 道徳」と連携した小学校家庭科の指導上の留意点:『家族愛、家庭生活の充実』の教材分析を通して』『日本家庭科教育学会誌』第63巻第4号、日本家庭科教育学会、2021年、pp.191-202。
- 6) 藤川大祐「中学校道徳教科書における少数者の扱いの検討」『授業実践開発研究』千葉大学教育学部授業実践開発研究室、第12巻、2019年。
- 7) 浅香怜子「伝統文化を題材とした「考え、議論する道徳」の授業実践:盆踊りは誰のもの…?」『東京未来大学研究紀要』第10号、2017年、pp.155-165。
- 8) 鈴木慎一郎「小学校道徳教科書における『我が国や郷土の文化』日本の民謡に着目して」『鳥取大学地域学部紀要 地域学論集』第15巻、第2号、2019年、pp.83-94。
- 9) 板倉ほか「日本の伝統文化を重んじた中学校道徳教育の実践的研究」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』28号、2017年、pp.29-42。
- 10) これまで筆者は『山口学芸研究』において発表してきた。例えば以下。川野哲也「読み物資料に基づく道徳授業の考察(6)」『山口学芸研究』第16号、2025年、pp.28-40。
- 11) 本来は「郷土愛」というキーワードもまた視野に入れるべきであるが、本論では中心的課題から外した。学習指導要領には「郷土で培われてきた伝統文化」と示されており、より中心的なテーマである伝統文化に絞って検討することにした。
- 12) 河合隼雄著『父親の力 母親の力』講談社、2004年。
- 13) 柏木恵子著『親と子の愛情と戦略』講談社現代新書、2011年。
- 14) 『平成29年告示 中学校学習指導要領解説 道徳編』文部科学省。
- 15) エーリッヒ・フロム著、鈴木晶訳『愛するということ』紀伊国屋書店、2020年。
- 16) 同上、p.42。
- 17) 「ブラッドレーのせいきゅう書」『わたしたちの道徳 小学校三・四年生』文部科学省。「お母さんのせいきゅう書」『新しい道徳 4』東京書籍。なお東京書籍版では主人公はたかしである。
- 18) 市川麻衣「家族の愛情に感謝し、その一員として進んで役に立とうとする児童を育てる」赤堀博行

- 編著『道徳授業の定石事典 中学年編』明治図書、2012年、pp.131-138。
- 19) 例えば、篠田恵里「ブラッドレーのせい求書」赤堀博行編著『小学校 考え、議論する道徳科授業の新展開 中学年』東洋館出版社、2018年、pp.80-83。
 - 20) 加藤宣行著『教師の発問力』東洋館出版、2012年、pp.112-123。授業者は竹井秀文。
 - 21) 堀田和秀著『道徳の授業プラン』学芸みらい社、2018年、pp.91-95。
 - 22) 杉本遼、高宮正貴共著『小学校道徳 発問組み立て事典』明治図書、2024年、pp.110-119。
 - 23) 福井三玄「たまご焼き」『新しい道徳 5』東京書籍。
 - 24) 鈴木裕子「家族のために進んで役に立とうとする児童を育てる」赤堀博行編著『道徳授業の定石事典 高学年編』明治図書、2012年、pp.163-170。
 - 25) 赤堀博行「卵焼き」赤堀博行編著『小学校 考え、議論する道徳科授業の新展開 高学年』東洋館出版社、2018年、pp.84-87。
 - 26) 飯島進「教材『卵焼き』を新しいタイプの道徳授業で考えると…」
https://note.com/496_ijjima/n/nd69fbd4451e (2025.12.27)
 - 27) 北鹿渡文照「一冊のノート」『私たちの道徳 中学校』文部科学省。
 - 28) 村田寿美子「一冊のノート」横山利弘監修、牧崎幸夫ほか編著『楽しく豊かな「道徳の時間」をつくる』ミネルヴァ書房、2015年、pp.187-191。
 - 29) 磯部一雄、杉中康平共著『「動き」のある道徳科授業のつくり方』東洋館出版社、2020年、pp.84-95。
 - 30) 竹内稔博「家族愛」柳沼良太ほか編著『生徒が本気になる問題解決的な道徳授業 中学校』図書文化、2018年、pp.162-167。
 - 31) 富岡栄の実践は問題解決型である。富岡栄「一冊のノート」『道徳教育』編集部編『教材研究×道徳 定番教材の外せないポイントがわかる超実践ガイド』明治図書、2023年、pp.158-161。
 - 32) 山本素子著『日本文化 ビジュアル解体新書』SBクリエイティブ、2019年。しきたりについては飯倉の書でよく整理されている。飯倉晴武著『新装版 日本人のしきたり』青春新書インテリジェンス、2023年。
 - 33) 松藤司著『先生も生徒も驚く日本の「伝統・文化」再発見』学芸みらい社、2012年。
 - 34) 原田実著『江戸しぐさの正体 教育をむしばむ偽りの伝統』星海社新書、2014年。なお「江戸しぐさ」については、『私たちの道徳 小学校五・六年』の礼儀作法の項、その他副読本にも採用されていた。
 - 35) 梶田叡一「わが国の伝統・文化の教育の潮流」中村哲編著『学校を活性化する伝統・文化の教育』学事出版、2009年、pp.13-20。
 - 36) 『平成29年度告示 中学校学習指導要領解説 道徳編』文部科学省。
 - 37) 文部省初等中等教育局『道徳教育推進指導資料・指導の手引7 小学校 文化や伝統を大切にすることを育てる』1999年、pp.3-6。
 - 38) 松岡正剛著『日本文化の核心』講談社現代新書、2020年、pp.120-125。
 - 39) 笠原昭一「祭りだいこ」『きみがいちばんひかるとき どうとく4』光村図書。
 - 40) 荒川茂樹「地域の伝統・文化を大切にしようとする児童を育てる」赤堀博行編著『道徳授業の定石事典 中学年編』明治図書、2012年、pp.147-154。
 - 41) 例えば、井原賢一「祭りだいこ」赤堀博行編著『小学校 考え、議論する道徳科授業の新展開 中学年』東洋館出版社、2018年、pp.170-173。
 - 42) 「人間を作る道 剣道」『私たちの道徳 小学五・六年』文部科学省。
 - 43) 中治謙一「我が国の伝統と文化を大切にしようとする児童を育てる」赤堀博行編著『道徳授業の定石事典 高学年編』明治図書、2012年、pp.179-186。
 - 44) 例えば、保延秀紀「人間をつくる道 剣道」赤堀博行編著『小学校 考え、議論する道徳科授業の新展開 高学年』東洋館出版社、2018年、pp.92-95。
 - 45) 古見豪基「人間をつくる道 剣道」柳沼良太ほか編著『小学校 問題解決的な学習で創る道徳授業パーフェクトガイド』明治図書、2016年、pp.120-123。
 - 46) 杉本遼、高宮正貴共著『小学校道徳 発問組み立て事典』明治図書、2024年、pp.150-159。
 - 47) 「古都の雅、菓子的心」NHKプロフェッショナル制作班編『新しい道徳1』東京書籍。なおこの内容はドキュメンタリー番組としてNHKで放送されたものである。『プロフェッショナル仕事の流儀 第97回』2008年9月9日放送。
 - 48) 飯島進「『古都の雅、菓子的心』を新しいタイプの道徳授業で考えると…」
https://note.com/496_ijjima/n/n00d_4afd_5a903 (2025.12.27)

- 49) 松岡正剛、前掲書、第八講「小さきもの」。
- 50) 内田仁志「古都の雅、菓子的心」山中伸之ほか編著『全時間の授業展開で見せる「考え、議論する道徳」中学校』学事出版、2018年、pp.78-79。
- 51) 川野哲也「読み物資料に基づく道徳授業の考察（5）」『山口学芸研究』第14号、2023年、pp.1-13。